造形活動・図画工作についての一考察

― 子どもの描画・工作活動における留意点について ―

A Study of Modeling Activity and Craft

若　山　　哲

Tetsu Wakayama

「福岡女学院大学紀要　人間関係学部」第 25 号抜刷

2024 年 3 月

造形活動・図画工作についての一考察
― 子どもの描画・工作活動における留意点について ―

A Study of Modeling Activity and Craft

若　山　　哲
Tetsu Wakayama

キーワード：教育方法　幼児造形　図画工作　題材

1．はじめに

筆者が勤務する大学の教員養成課程に在籍する学生の中には、図画工作、美術といったものに苦手意識や抵抗感を持った学生が少なくない。授業において最初に行うアンケート調査でも、図画工作・美術について「徐々に嫌いになった」、あるいは「元々自信がなく嫌いである」という回答が一定の割合であり、このことからは個性や性格として先天的に美術や図画工作について苦手だと感じている学生と、図画工作や美術の授業経験から苦手意識を持った学生が存在することが伺える。そのうえで、図画工作・美術が苦手といってもその理由は様々であり、授業最初のアンケートでも「アイデアがでない」「周囲と比べてしまう」「先生からの評価、声掛けで苦手になった」「汚れるのが嫌」「絵を描くのは苦手だが工作は好き（又はその逆）」など多様な理由が挙げられる。

幼児期における造形活動や小学校における図画工作は、子ども達の豊かな情操や感性を育むために重要である。造形活動、図画工作について学校教育においての扱いについて確認してみると、幼稚園教育要領[1]の領域表現ではそのねらいと内容について以下のように記されている。

表　現
「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする」

1　ねらい
(1)　いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性を持つ。
(2)　感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ。
(3)　生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ。

2　内　容
(1)　生活の中で様々な音、形、色、手触り、動きなどに気付いたり、感じたりするなどして楽しむ。
(2)　生活の中で美しいものや心を動かす出来事に触れ、イメージを豊かにする。
(3)　様々な出来事の中で、感動したことを伝え合う楽しさを味わう。
(4)　感じたこと、考えたことなどを音や動きなどで表現したり、自由にかいたり、つくったりなどする。
(5)　いろいろな素材に親しみ、工夫して遊ぶ。
(6)　音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりなどする楽しさを味わう。
(7)　かいたり、つくったりすることを楽しみ、遊びに使ったり、飾ったりなどする。
(8)　自分のイメージを動きや言葉などで表現したり、演じて遊んだりするなどの楽しさを味わう。

また小学校学習指導要領[2]においては教科としての図画工作の目標は、以下のように設定されている。

表現及び鑑賞の活動を通して、造形的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の形や色などと豊かに関わる資質を次のとおり育成することを目指す。

⑴　対象や事象を捉える造形的な視点について自分の感覚や行為を通して理解するとともに、材料や用具を使い、表し方などを工夫して、創造的につくったり表したりすることができるようにする。

⑵　造形的なよさや美しさ、表したいこと、表し方などについて考え、創造的に発想や構想をしたり、作品などに対する自分の見方や感じ方を深めたりすることができるようにする。

⑶　つくりだす喜びを味わうとともに、感性を育み、楽しく豊かな生活を創造しようとする態度を養い、豊かな情操を培う。

幼稚園教育要領、小学校学習指導要領において共通して言えることは、制作活動について自分の感性や見方、感覚を大切にすることであり、このことからも幼児期の造形活動や図画工作の授業を通して、個々の感性を肯定的にとらえることを目的としていることが明確に読み取れる。しかしながら、前述したように実際には制作活動や美術鑑賞について様々な理由で苦手意識を持ったままの学生がおり、その苦手意識の要因としては、学習主体にとって興味が持てない課題に取り組まなければならないことや、イメージと技術とのギャップによる自己を肯定的に評価できないこと、作品に対しての教育者からの評価と自己評価とのギャップ、美術作品に対する定型的な評価と自己の評価の違いなど多岐にわたり、総じて美術を難解であると捉える傾向がある。

教員、保育者養成における造形指導では、そういった学生の苦手意識についてきちんと把握し、それぞれの学生が制作においてどういった場面で躓きを感じているのか理解することが重要であり、そのうえで将来指導する立場になる学生に造形活動が苦手と感じる様々な要因について理解してもらう事が重要である。保育者、教師が指導者として関わる場合、その関わりは重要であるが、成實・坂下（2022）[3]によると他地域教育実践演習における図画工作の実践において言語よりも題材設定、授業構成の重要性をあげている。このことは制作活動において制作過程での指導よりも課題設定とその課題への理解が重要であるという事を意味している。

そこで、本研究では図画工作の授業においてポピュラーな「交通安全のポスター制作」「理想の家を作ってみよう」の２つの課題について実際に学生に制作してもらったうえで質問紙調査を行い、各課題の性質と学生がそれぞれの課題制作の過程でどう感じたかについて明確にし、そのことから課題の性質と実践を行う際の指導上の留意点について考察したい。

２．調査の概要と方法

以下の方法で、造形課題に対する意識と時間設定について調査を実施し分析を行った。

調査方法：配布による質問紙調査による実態調査

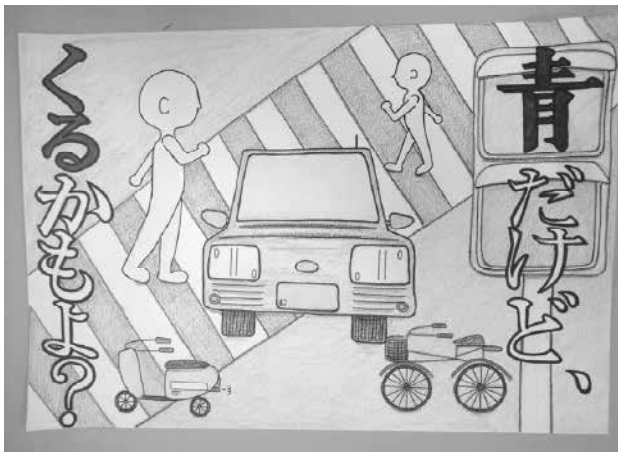
調査対象：本学２年生『初等教科教育法「図画工作」』履修学生を対象にアンケート調査を実施した。配布数は 51 で有効回答数は 51 であった（回収率 100％）。無回答の項目も分析対象とした。

調査時期：2022 年 12 月第 12 週

調査項目：２年次後期『初等教科教育法「図画工作」』において行った２つの作品制作について、課題制作において制作前、制作中、制作後にどのように感じていたかについて質問紙を作成して調査を行った。

作品例

交通安全のポスター



理想の家

課題の概要

課　題	概　要	主な描画・制作材料	時間設定
交通安全のポスター	平面作品	画用紙・クレヨン・水彩絵の具・色鉛筆・水性ペン・折り紙等	90分×3コマ
理想の家	立体作品	紙粘土・厚紙・画用紙・割りばし・輪ゴム・ストロー等	90分×3コマ

どちらの課題も材料の指定は行わず各自で使いたい材料を使用できるようにした。

質問項目

Ⅰ　制作のアイデア	
1．すぐにイメージできた	
2．比較的早くイメージできた	
3．やや時間がかかった	
4．時間がかかった	
Ⅱ　制作過程	
1．イメージしたようにできた	
2．ある程度イメージしたようにできた	
3．ややイメージと違った	
4．イメージと違った	
Ⅲ　完成した作品	
1．満足している	2．ある程度満足している
3．やや不満がある	4．不満である
Ⅳ　こだわった点	
1．構図・フォルム	2．色彩
3．形	4．質感

＊質問Ⅳこだわった点に関しては複数回答可とした。

3．調査結果と考察

質問Ⅰ　制作のアイデアについて

図１と図２は交通安全のポスターと理想の家それぞれの制作のアイデアについてである。「すぐにイメージできた」との回答は交通安全のポスターで18％、理想の家で16％とあまり差異は見られないが、「比較的早くイメージできた」とする回答については交通安全のポスターが51％なのに対し理想の家では33％、「やや時間がかかった」という回答で交通安全のポスターが25％、理想の家では41％、「時間がかかった」という回答では交通安全のポスターで６％、理想の家では10％と理想の家のほうが、ややイメージしにくかったという結果となった。これは交通安全のポスターがこれまでの鑑賞、制作の経験からイメージしやすいのに対して、理想の家の場合、最初にどのような家を理想とするかについて考える時間が必要だったからだと考える。

実践の際にも理想の家では制作に取り掛かるまでに多くの時間がかかっていた。しかしながら学生の様子からはアイデアが出なくて困っているというより、どんな家にするのか楽しみながら悩んでいるように感じられた。筆者が行う授業最初のアンケートでも絵を描くことが苦手な学生の何割かはアイデアが出ないことを苦手としている。イメージしにくくアイデアを出しづらい課題では困るが、アイデアを出すことを楽しめ

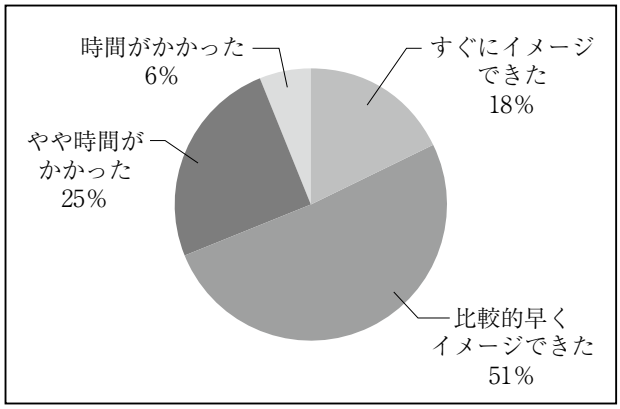


図１　交通安全のポスター　アイデア

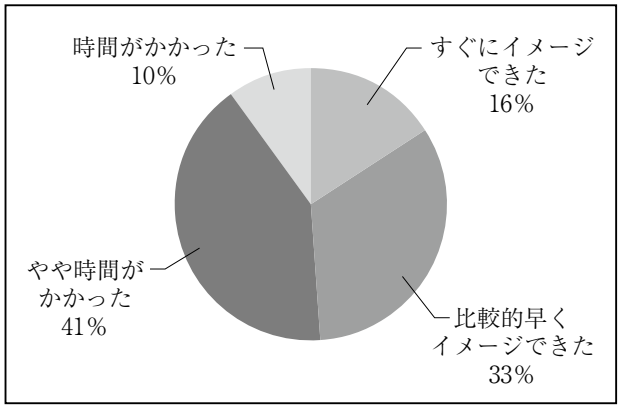


図２　理想の家　アイデアについて

るような、学生が身近に感じられる課題設定が重要である。また制作においてアイデアを考える時間というものは、非常に重要である。急いで制作に取り掛かるよう促すのではなく、時間が掛かっても良い事を伝えたうえで、立派なアイデア（斬新なアイデアであることや、人と違うアイデアであること）が重要ではなく、自分なりに考えることそのものが重要であることを伝えていけたらと考える。

質問Ⅱ　制作過程について

制作過程については交通安全のポスター、理想の家で大きく結果が異なった。交通安全のポスターでは「イメージしたようにできた」が29％、「ある程度イメージしたようにできた」が59％、「ややイメージと違った」が12％、「イメージと違った」が０％なのに対して、理想の家では、「イメージしたようにできた」が８％、「ある程度イメージしたようにできた」が33％、「ややイメージと違った」が39％、「イメージと違った」が20％となり交通安全のポスターに比べ理想の家ではイメージ通りに制作が進まなかった様子が見られる。特に交通安全のポスターではイメージと違ったが０％となっており、絵を描くことが苦手な学生であってもイメージしたものに近づく何らかの手ごたえがあったことが伺える。これは描画活動のほうが画材（鉛筆や絵の具）の扱いに慣れており思い通りの色や形を再現しやすいのに対して、工作活動の場合、限られた素材での立体の造形に無理があったり、部品の接着、成形が難しかったりすることによる違いだと考えられる。

質問Ⅲ　完成した作品について

完成した作品についてでは、交通安全のポスターで「満足してる」27％、「ある程度満足している」57％、「やや不満がある」14％、「不満がある」２％であった。理想の家では「満足している」が21％、「ある程度満足している」49％、「やや不満がある」22％、「不満がある」が８％となっており、理想の家のほうが交通安全のポスターに比べて満足度が低いことがわかる。このことは制作過程において理想の家のほうがイメージ通りに作るのが難しかったという結果から考えると必然であるといえる。しかしながら理想の家の制作過程については「イメージと違った」と「ややイメージと

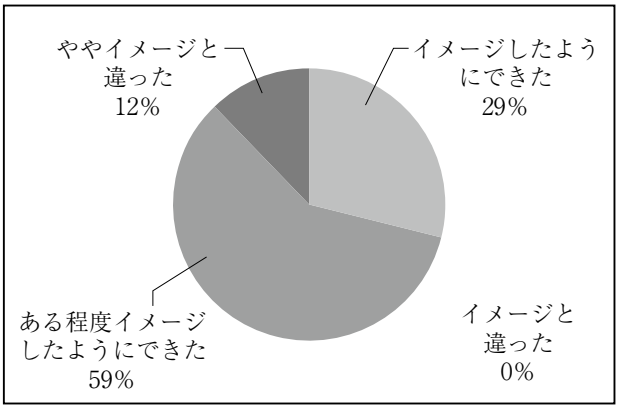


図３　交通安全のポスター　制作過程

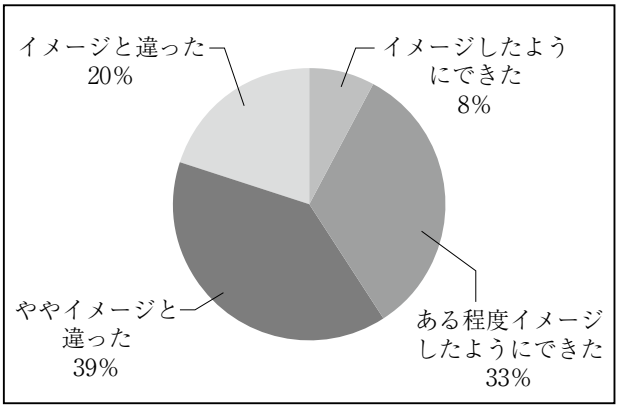


図４　理想の家　制作過程

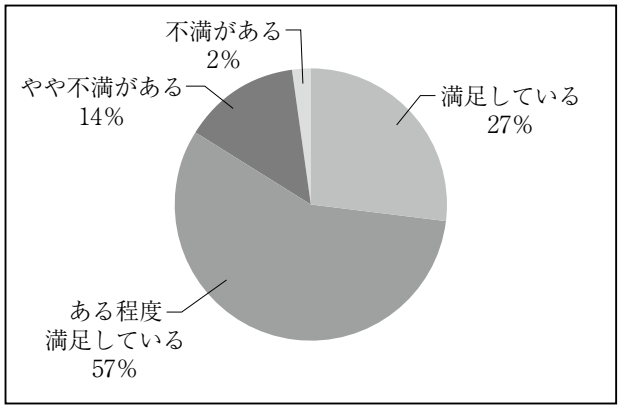


図５　交通安全のポスター　完成

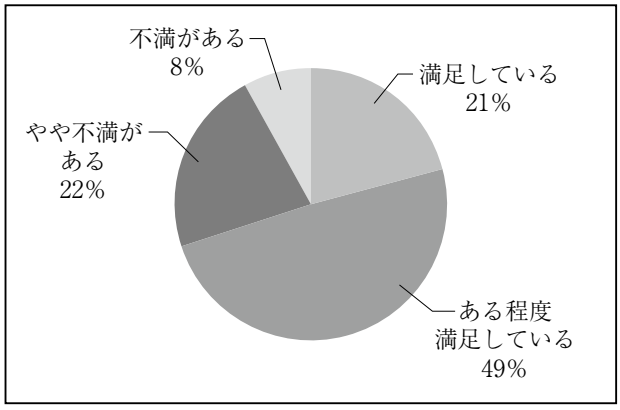


図６　理想の家　完成

違った」をあわせて59％なのに対して、完成した作品に「不満がある」、「やや不満がある」は30％となっており、思い通りにできなかったが結果としての作品には満足してる学生が多くいることが伺える。交通安全のポスターでは「イメージと違った」と「ややイメージと違った」が12％、完成した作品について「不満がある」と「やや不満がある」で16％となっており、こちらは思い通りにできなかった割合より完成作品に不満がある割合のほうが高くなっており、このことは先に述べた扱いやすい描画材料と工作素材との違いだと考えられる。

質問Ⅳ　こだわった点について

こだわった点については交通安全のポスターと理想の家で大きく異なる結果となった。

交通安全のポスターでは「構図」64％、「色彩」34％、「形」２％、「質感」０％という結果となり、ほぼ構図と色彩に意識を向けて制作しており、形、質感に関してはあまり意識していないことが読み取れる。それに対して理想の家では、「フォルム」37％、「色彩」23％、「形」25％、「質感」15％とややフォルムが多く、

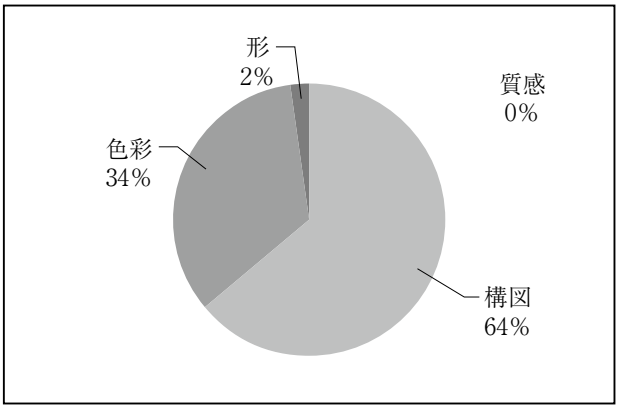


図７　交通安全のポスター　こだわった点

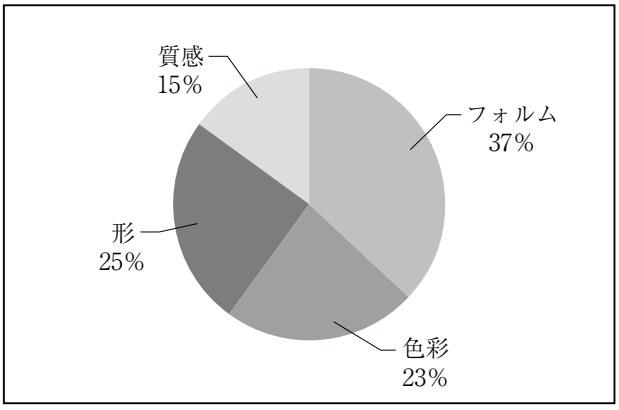


図８　理想の家　こだわった点

質感へのこだわりが少なくはあるが、学生一人一人がそれぞれ別のこだわりをもって制作に取り組んでいたことがわかる。描画活動において構図や色彩に意識が傾くのは感覚的にわかるが、予想以上に形、質感への意識が低い結果となった。このことは今後の指導の際に留意していきたいと考える。また工作活動である理想の家では様々な部分に対して学生がこだわりを持っていたことがわかる。出来上がった作品を観ても発想や大きさ、材料など多様でありユニークな作品が多くみられた。特に材料についてはどちらの課題も自分の使いたい材料を自由に使えるよう設定して制作を行ったが、交通安全のポスターより理想の家のほうが多様な材料を使用して制作されていた。

４．まとめ

今回、描画活動と工作活動という異なる２つの課題で実践、調査を行ったが、課題によって学生の制作に対する意識に大きな違いが見られた。交通安全のポスター（描画活動）ではアイデアや制作過程の段階では順調に制作に取り組んでいる様子が見られるが、出来上がった結果についてやや満足度が低いものとなった。それに対して理想の家（工作活動）ではアイデアや制作過程で難しさを感じている様子が見られるが結果に対しては満足度が高く、制作において制作過程での難しさが完成の満足度に直結しないことがわかる。

このことから描画活動では、自身で作ろうと思うものに対して明確なイメージがありそれに向かって制作を進めていくが、結果として出来上がった作品に満足しておらず、工作活動では自分で思ったように制作は進まなかったが、結果としてできた作品には満足しているというように読み取れる。これは作品制作において自身のイメージ通りに作品ができることが作品の満足度のすべてではないことを示していると考える。筆者は制作活動において自身の意図しなかった要素、思いがけない形や色、質感など偶発的な要素が大切でありそれらが作品の魅力になると考える。今回、質問Ⅱ「制作過程」と、質問Ⅲ「完成した作品」のイメージとの相違や満足度について課題ごとに大きく違ったことについては、比較的扱いが容易で使い慣れた描画材料に比べ、工作活動での素材、材料の扱いが難しく思

い通りに出来ないことによって、そういった偶発的魅力が作品に反映された結果であると考える。

また質問Ⅳ「こだわった点」についてもそれぞれの課題で大きく異なる結果となった。描画活動である交通安全のポスターではほとんどが構図、色彩にこだわりを持って制作していたという結果に対して、理想の家では質感の割合がやや少ないものの、フォルム、形、色彩、質感それぞれにこだわりを持って制作に取り組んだことが伺える。

これは理想の家の制作する際にどこを大切にしたいのか、どんなものを作りたいのかについて学生それぞれで違っていた事を意味するが、その結果として理想の家ではバラエティ豊かな作品が多く出来上がったと考える。

実際に今回アンケートの対象とした２つの課題の完成作品を比較してみても、交通安全のポスターに対して理想の家の課題のほうが、作品の内容に幅があり指導者から見て予想外の作品も多く見られた。交通安全のポスターでも様々な作品が見られたが、学生たちの作品全体からポスターらしい作品を作ろうとする意識が感じられた。これはポスターという課題を出しているわけだから、学生からしたら当然そういう意識が働くわけだが、この「ポスターらしい作品」や「写生らしい作品」という感覚は、豊かな感性、情操を養う事の足枷となりうる。いわゆる枠組みからはみ出るような豊かな感性というものは、指導者から言われてやることではない。そのため、この「〇〇らしさ」というものについて指導の際に具体的に何かする必要はないと考えるが、指導者自身がそういった枠組みに捉われないことは重要であると考える。

そのうえで「〇〇らしさ」というのは、どのような作品を制作するのかということについての指標として有効である。交通安全のポスターにおいて質問Ⅰ「制作のアイデア」について「すぐにイメージできた」「比較的早くイメージできた」が７割近くの回答となったこと、質問Ⅱ「制作過程」の「イメージしたようにできた」「ある程度イメージしたようにできた」が９割の回答を得たのもそのためであると考えられる。

このことから造形活動でのテーマ設定において課題のイメージを明確に提示することは制作しやすさにつながるが、自由な発想の妨げになるともいえる。指導者として課題設定の際にはそのことに留意して課題を提示することが重要である。

教員養成課程における指導においては、学生が将来子ども達を指導する立場に立つことを踏まえて、課題制作や技術習得のみならず、提示した課題がどのような性質があるのか、その場合の留意点として何に気を付けていくかについて伝えることが重要であると考える。

[1] 放幼稚園教育要領：文部科学省，平成 29 年年 3 月，pp.8

[2] 小学校学習指導要領解説図画工作編：文部科学省，平成 29 年年 3 月，pp.87

[3] 成實智子　坂下真美：大阪教育大学紀要　総合教育科学第 71 巻，2023 年 2 月，pp.449 ～ 462